

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：32665

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26820270

研究課題名(和文)大工棟梁「明王太郎」の建築生産活動に関する研究

研究課題名(英文)The Architectural Production Activities of a Daiku-Toryo "Myouo-taro"

研究代表者

山岸 吉弘(YAMAGISHI, Yoshihiro)

日本大学・工学部・助教

研究者番号：40454201

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：近世建築生産史の研究が近畿地方に集中する状況にあつて、関東地方を代表する大工棟梁「明王太郎」に注目し、遺された膨大な史料を用いて実証的な考察に努めた。更に、他の家系や地域の大工にまで視野を広げ、立体的かつ重層的に大工棟梁の存在を復元・構築することを目指した。その結果、地域に固有の条件を巧みに利用し、建築生産に必要な人・もの・情報の獲得を実現していたことが明らかとなった。また、市井の職人である大工棟梁が、出現し成長していく過程を辿ることができた。

研究成果の概要(英文)：In a situation where studies on the history of early-modern architectural production are centralized in Kinki region, this study focused on a Daiku-toryo (master carpenter) named "Myouo-taro" as a representative of Kanto region to give a demonstrative examination using a vast amount of historical records. It also intended to recover and concretize his multilayered existence from all angles by broader investigation into other families and local carpenters. Consequently, it became clear that he took advantage of the inherent conditions in the local area to obtain staffs, materials, and information that were necessary for his architectural production. The process of how an ordinary craftsman of Daiku-toryo emerged and matured was also successfully traced.

研究分野：日本建築史

キーワード：建築生産 大工棟梁 大工仲間

1. 研究開始当初の背景

わが国の建築史学という学問領域にあって、近世大工に関する研究は既に膨大な蓄積があり、特に畿内を中心とする大工仲間の研究は盛んに行われてきた。また、幕府の被官大工についても古くから研究され、とりわけ在京機関として地域の建築行政を担った大工頭中井家に関しては、残された豊富な史料から詳細に論じられている。これら以外にも、諸藩の大工組織や、地域の大工集団を扱う研究が行われており、個別具体的に解明が進められている。このように、建築生産を扱う研究は、建築史学において一つの代表的な分野として確立している。一方で、江戸やその周辺など関東圏を対象にした研究は数が少ない。近世大工の活動はそれらが属する社会に大きく規定されるため、一つの地域の事例をもって一般的な見解にはなり得ない。地域ごとに異なる歴史を辿っているのであり、例えば、市井の大工は社会の在り方に大きく左右されるだろう。つまり、江戸やその周辺において大工の研究が行われていないことは、必然的に現在の近世大工像が偏ったものであるといわざるを得ない。そのような状況において、東国を代表する大工棟梁である明王太郎が注目される。

2. 研究の目的

建築生産に関する研究が進展する中で、対象が近畿地方に集中するという偏りが生じており、関東地方における建築生産史の研究を進める必要があった。大工棟梁「明王太郎」の存在は、上記のような問題に対して適切な研究対象として位置付けられる。明王太郎の存在が知られることになった契機として、膨大な量の史料が公開されたことが挙げられる。歴代の明王太郎が残した史料が今日まで残されており、それらが神奈川県立公文書館に寄託・保管されている。その際、史料は分類・整理され、基礎調査の結果が『相模国大山大工棟梁手中家資料所在目録稿』（神奈川県教育委員会、1997年3月）にまとめられた。総数5,112点以上の膨大な史料を目録化する作業自体が一つの成果ではあるが、内容の検討にまでは至っておらず、新たな展開もみられないのが現状である。史料の質的・量的な豊富さに見合うだけの研究を行うことが、現在の学術的な課題となっている。

遺された史料を手掛かりに、大工棟梁「明王太郎」を実証的に考察することが研究の目的である。更に、他の家系や他の地域に遺された史料まで対象の範囲を広げ、立体的かつ重層的に大工棟梁の存在を復元・構築することを目指す。それより、関東地方における大工棟梁の存在を相対化・一般化し、近畿地方の大工棟梁と比較分析することが可能となる。江戸時代における大工棟梁の理解を進化させ、普遍的な大工棟梁象の確立を目論んでいる。

3. 研究の方法

本研究の基礎史料となる明王太郎家伝来の古文書「手中家資料」は、全て神奈川県立公文書館に保管されている。これまでの研究において、ある程度の分量は既に収集を終えているが、新たに本研究を実施する上で不足する分があるため、改めて収集作業を実施する。具体的には、普請帳や日記など作業の様子が分かる古文書に注目するほか、仕事の請負や物品の売買など契約を交わした証文の類、建築資材や労働量を計画・記録した積算関係の書類などが対象となる。

史料の収集作業と並行して、適宜に古文書の読解と分析を行う。まず、明王太郎と施主との間で交わす請負証文の内容を整理・分析し、研究の足掛かりとする。証文には、発注する側と受注する側の名前が明記され、契約を交わす主体が判明し、取り決められた工事の期間・内容・金額などが明確になる。これらの情報より、普請が行われる基本的な状況を把握することができる。また、建築生産を行うための体制を整理する。明王太郎の普請においては、一門で完結する場合と職人を雇い入れて組織する場合の、二つの形態が存在していたことを既に確認している。それを踏まえて、個別の寺社での事例をまとめる。また、手斧始めから上棟までの普請の全工程を辿り、その内容を把握する。明王太郎を始めとする大工が担当する仕事のほか、各職人や人足が受け持つ仕事などで分類する。

明王太郎とその一門の活動に加えて、建築生産活動に関連するそれ以外の人や物など、外部要素の相互関係性に注目するため、幅広く地域の史料を参照する必要がある。地域史料の読解・分析を通じて、明王太郎が請け負う普請において、施主の側が果たす具体的な役割を明確にする。これまでの研究により、施主も何らかの形で工事に参加することを解明している。それぞれの寺社や名主等の家に伝来する古文書より、施主の役割を考察する。また、普請を行うために必要な木材や金物といった資材の調達方法を検討する。また、人間や物資の移動の範囲や経路、或いはそれらの相互関係性等といった観点より、明王太郎の活動形態に即した地域社会の在り方を考察する。

4. 研究成果

近世建築生産史の研究が近畿地方に集中する状況にあって、関東地方を代表する大工棟梁「明王太郎」に注目し、遺された膨大な史料を用いて実証的な考察に努めた。更に、他の家系や地域の大工にまで視野を広げ、立体的かつ重層的に大工棟梁の存在を復元・構築することを目指した。その結果、地域に固有の条件を巧みに利用し、建築生産に必要な人・もの・情報の獲得を実現していたことが明らかとなった。また、市井の職人である大工棟梁が、出現し成長していく過程を辿ることができた。

(1) 明王太郎による大山阿夫利神社本宮の普請について

阿夫利神社は相模国の大山(伊勢原市大山)に境内を構え、山頂の本宮には大山祇命を祀る。当山は古来より山岳信仰の聖地であったと考えられ、修験者の道場でもあったが、後に神社として体制が整えられたらしい。古代には別当となる大山寺が山内に創建され、神仏習合すると祭神は石尊大権現とも呼ばれた。中世には厚く信仰された武家からの寄進を集めて一大勢力となり、兵力を保持するまでに成長した。近世になると幕府から僧兵の下山が命じられ、清僧のみが入山を許されるなど、山内の改革が断行される。同時に幕府からの保護を受け、徳川家からの崇敬もあり、関東五カ寺の触頭に任じられている。更に、大山信仰は庶民の間にも普及し、江戸を中心に関東地方を越えて各地で大山構が組織され、大山詣りが流行した。

明王太郎は大山を拠点にした大工棟梁で、代々に渡り家業として技術を継承し伝統として名跡を襲名し、由緒は古く遡る。具体的にその存在を確認することができるのは、光明寺仁王門像(平塚市南金目)の体内にある延徳5年(1493)の墨書で、「大工明王太郎末孫吉宗」と記されている。目覚ましい活躍をみせるのは江戸時代に入ってからで、相模国や武蔵国を中心に各地で多数の社寺建築を手掛けただけでなく、年季奉公で弟子を受け入れ育成し、大工として独立させている。大山大工である明王太郎は、阿夫利神社や大山寺の堂舎における普請にも棟梁として参加している。歴代の明王太郎は膨大な記録を残しており、具体的に活動の内容が知れる。本稿では、特に阿夫利神社本宮に注目し、明王太郎による社殿を史料から復元しつつ特徴を考察する。本宮は元禄・宝永・享保・安永期に修復や再建が行われ、元禄から享保期の普請では明王太郎吉當が、安永期の普請では明王太郎景直が、それぞれ大工棟梁を務めた。主に、社殿の建築や普請の内容について、実態の把握と特質の分析を目指す。

元禄・宝永・享保・安永期における大山阿夫利神社本宮の修復・再建について、吉當と景直による普請の内容を検討した。その結果、吉當は従前の社殿の形態を保持しつつ普請を繰り返してきたが、景直はその社殿の基本的な構成を継承しつつも規模や機能を拡大させていた。また、平面計画において吉當は京間や田舎間など一間の単位を用いていたが、景直は枝数を考慮して柱間を決定していた。

費用は大きく職人の手間と材料の代金に充てられ、前者においては手間を積算するために基準となる一人当たりの手間賃が設定されていた。その額は職人や人足によって異なるだけでなく、毎回の普請によっても差がみられた。また、後者においては材料の多くは江戸から調達しており、海運・舟運・陸運

の費用も含めて計上されていた。

大山阿夫利神社本宮の社殿の概要と明王太郎による普請の一端を、それぞれ明らかにすることができた。

(2) 明王太郎と荻野村大工の関係について

大工技術の継承と蓄積という問題について、近世相模国を対象に考察した。その結果、農村大工の活動の変遷を、成立・成長・展開の各段階に区分して理解することができた

(図1)。荻野村を中心とする一帯には、大工を生業とする複数の家系が存在した。それらの多くで、既に高い実力を備えた大工が棟梁を務める普請に参加していた。現場で学習する機会があったことから、村落の外部から技術の摂取されていたことが想定された(成立期)。その後、各々の家系で大工という職能が再生産され、仕事が継承されていく。身に付けたものが次代へと受け継がれることにより、村落の内部に技術が蓄積されるようになる(成長期)。やがて、棟梁を始め普請のための組織を村々の大工により構成することができるようになる。村落内外の社寺建築や住宅建築など、地域の建築生産を実現するために必要となる専門的な労働力を、量・質の両面から供給するまでに至る(展開期)。

改めて、技術の継承や蓄積は人を媒介に成し遂げられていたといえよう。地縁による人的関係性の内に技術が伝播され、血縁による人的関係性の内に技術が保持される。であるならば、個人による主観が建築という造形に少なからず反映することが想定される(例えば、現代的な視点でいうところの作家性の表出)。大工の技術的な系譜を踏まえた建築の差異を指摘し得る可能性があるものの、その解明は今後の課題である。

なお、本稿の該当する学問領域においては既に多くの蓄積があり、さまざまな報告が行われている。特に、近畿地方を対象とする研究が目覚ましく、成果は一定の水準に達したといえよう。次なる研究の段階として、個々の事例を踏まえた歴史事象の一般化が目指されなければならない。それは容易でないが、都度に提案することも必要であろうことから若干の私見を述べる。例えば、京や大坂の都市域ではともかく畿内・近江の農村域においても大工組などが形成され、大工は社会的な枠組みの中に位置付けられている。権力による支配構造に生産組織が組み込まれており、その点より戦国時代からの構造を汲むとも理解できる。翻って相模国の大工をみると、決して個々の活動を規定するような外圧は看取されない。普請の体勢や手段を獲得する方途も、地域社会の特性を巧みに利用して棟梁が自ら工夫しているようである。つまり、荻野村大工には変遷する契機が内在していたといえよう。だからこそ、荻野村大工においても成立期・成長期・展開期の区分を設定することができた。

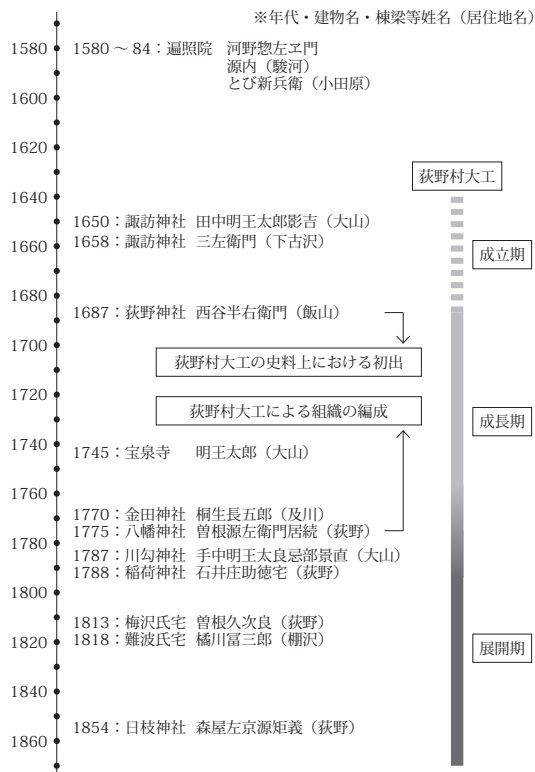


図1 荻野村を中心とした大工の推移

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計2件）

①山岸吉弘、近世相模国の大工にみる技術の継承と蓄積、日本建築学会計画系論文集、有、731、2017、201-207

②山岸吉弘、「町家」の木造軸組構造にみる壁面性-伝統的民家における石材利用の可能性に関する研究（1）-、日本大学工学部紀要、有、56-2、2015、1-7

〔学会発表〕（計6件）

①山岸吉弘、近世相模国荻野村の大工、日本建築学会、2016/8/25、福岡大学（福岡県）

②山岸吉弘、明王太郎による在郷寺社普請（杉山神社を中心として）-明王太郎の在郷寺社における普請役の獲得について（その3）-、日本建築学会、2016/3/2、日本大学（東京都）

③山岸吉弘、村方による在郷寺社普請（杉山神社を中心として）-明王太郎の在郷寺社における普請役の獲得について（その4）-、日本建築学会、2016/3/2、日本大学（東京都）

④山岸吉弘、北口本宮富士浅間神社の享保期における境内整備と郡内大工について、日本建築学会、2015/9/4、東海大学（神奈川県）

⑤山岸吉弘、鷹ヶ峰光悦町の新出古図につい

て、日本建築学会、2015/3/3、日本大学（東京都）

⑥山岸吉弘、春日造りにおける身舎と向拝の関係について、日本建築学会、2014/9/12、神戸大学（兵庫県）

〔図書〕（計1件）

①山岸吉弘、中央公論美術出版、木割表現論、2014、288

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山岸 吉弘 (YAMAGISHI, Yoshihiro)

日本大学・工学部・助教

研究者番号：40454201